

個展「ねじれを編む」

福田 笑子

個展「ねじれを編む」を2023年10月23日から10月31日に東京のオリエアート・ギャラリーで開催した。この画廊では初めて、2021年以降に制作した作品14点を展示した。

素材と技法

かご（籠）から着想し、線状の素材を手で編むことで彫刻的な作品を制作している。彫刻といえば、木や石を彫ったり、金属のような硬い材料で作られたものが一般的だが、糸のような繊維やビニールなど柔軟な素材を編んで、柔らかな彫刻（soft sculpture）を構築している。かごの場合、編むときだけ材料を水でぬらすなどの方法で一時的に柔らかくして、乾くと固くなる性質を利用し制作される。一方、私の制作では常態で柔軟な素材を使用しているため、最終的な形態も柔軟性があり、吊ると自重によって変形する。その点でかごと布の中間のような存在であり、柔らかなかご、立体的な布といった特徴があると言える。



「輪郭をなぞる」H85×W75×D43 cm

苧麻、モノフィラメント、プラスチック、シリコン 2022

素材には、弾力（部材のはずむ力）や反発力（加わった力に対してはね返る力）のある芯材と、柔軟な巻材を組み合わせている。芯材は、透明な線状のナイロン糸やプラスチック製の幅広いテープ、半透明のチューブを裂いて作った厚みのある線材などで、その表面は、平らで一定なものや、凹凸や丸みのあるものなどがあり、弾力や反発力も材料によって異なる。一種類の材料を芯材にする場合もあれば、複数の芯材を一つの作品に使うこともある。巻材には、主にラミー（ramie）の糸を使用している。ラミーは苧麻（チヨマ、カラムシ）の一種であり、日本では苧麻の茎の皮から採れる靱皮繊維でできた糸が、小千谷縮、越後上布の原料とされている。天然繊維の中でもハリと強度が高く、シャリとした感触がある。芯材と巻材がその組み合わせによってどう影響しあうのか、巻材に用いる糸の太さや束にする本数が巻き留める力にどう作用するのか。そのような素材間の相互作用や、芯材と巻材をどのように動かして構造をつくるか。線的な構成と形態の結びつきに関心を持ち、実験を通して制作している。

編むことは、線という一次元の要素から二次元、または三次元を構築することである。本展の作品群は、「巻く」動作によって構成されている。二種類の線において、芯材にかかる遠心力を巻材が引きとめることでバランスをとっている。巻くことによって回転がかかり、芯材のもつ反発力が引き出されることで、結果としてねじれが起こると考えられる。線が面となっていく段階で、芯を積み上げる角度やその留め方などの要素が絡み合い、ゆがみ・ねじれ・振り返る・螺旋を描くといった現象が起きる。すなわち、二種類の素材の性質や組み合わせ・芯の積み方・巻材のかけ方・巻く頻度とその方向—これらの作用を探求すると、それぞれの要素がどう影響しあい、変化させあうかが明らかになる。そこで、巻く方向を変える、複数の面を組み合わせる、面に角をつくる、回転の軸をずらすといったアプローチをすることで、意識的に変則的なねじれを引き起こしている。

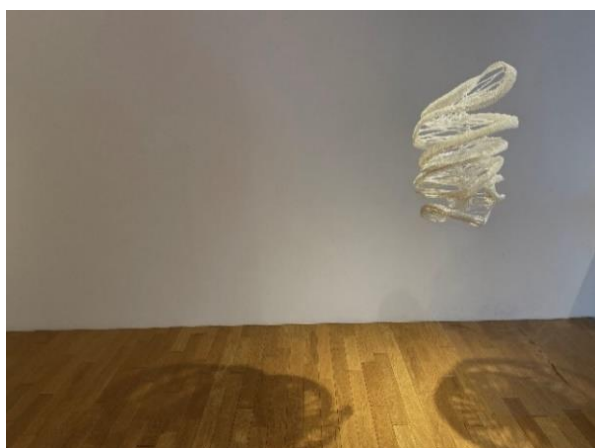
展示の概要

今展では新作の「螺旋」や、「交差螺旋」「輪郭をなぞる」「凹凸の角」のシリーズなど、吊るす作品を多めに展示した。会場の様子を紹介する。



「螺旋」 H62×W37×D39 cm 苧麻、プラスチック、鉄 2023

螺旋の径の長さに変化をもたせた。外周をなぞるように柔軟な素材を芯にして編むことで、縁のしなやかな動きが強調される。真上の方向に加えて斜め左上からも照明をあてることによって、床に落ちた二つの影も含めて、作品の一部としてとらえている。



「輪郭をなぞる III」 H40×W47×D40 cm

苧麻、モノフィラメント、プラスチック、シリコン
2022

「輪郭をなぞる」は、ねじれていく様子を形にとどめたシリーズである。平面を立体に起こす方法として、かご編みの張力に着目した。円の外周を編むうちに、円の上下で反対方向に引き合う力が生じる。すなわち、周回運動に起因するねじれが、形態につながっている。回転の向きによる変化を考え合わせることで、多様で複雑なねじれが起こる。

「輪郭をなぞる III」では右回転、左回転と異なる方向にねじれる3つの平面をつなげて、その外周を編むことにより、複雑な軸を持つ形となった。

多面的な立体は、視点によって見え方が変わる。写真では、同じ作品を三方向から撮影した。上下、前後をどう設定するかによっても変化する。作品のまわりを一周しながら、線の動きを目で追うと、空中に線を描いているような感覚になる。吊るすことで物体が重力から解放されて、曲線のしなやかな動きが目が行くことで、多面的な立体にもかかわらず、面の感覚があいまいに感じられる。編み目によるすき間から内部が見えるため、内と外の感覚を同時に引き起こさせ、線・面・立体の境界線がぼやけていくようだ。



「輪郭をなぞるⅧ」 H47×W32×D29 cm
苧麻、プラスチック 2023



「交差螺旋Ⅻ」 H86×W100×D38 cm

苧麻、プラスチック、モノフィラメント 2023

「交差螺旋Ⅻ」では、編むことで交差する線の相互作用に着目した。螺旋とその間を往復する線、それぞれの巻き進む方向が異なるため反発力が起こる。その結果、ねじれることで均衡を保っている。透視性もまた、かごの特徴であるといえる。編み目を通して内と外の空間が行き交うような構造となっており、線による構造では、作品の成り立ちが見えることで視覚のリズムを感じられる。層と層の編み目の線や点が重なったり交差しているように見えることで、空間性を帯びた立体が浮き上がってくる。



「凹凸の角」 H36×W28×D28

苧麻、モノフィラメント、プラスチック 2021

渦巻き状に編んだ面に角をつけることで、立体化した作品。布をつまむように角をつけている。タイトルの一部である「凹凸」とは、面と面をつまむときに山折り、あるいは谷折りにすることを指し、この作品では山、谷の組み合わせを考えることで反り返った形を作った。



「ねじれの輪」 H44×W14×D16 cm

苧麻、ナイロン糸、シリコン 2021



曲線、ジグザグ、うねり、ねじれといった有機的な外形は、数学的な規則性と編むことによって生じる現象の合わさった結果といえる。線状の素材を直接手で編むことが作品の手段であり、主題でもある。シリーズ化することで、実験的な側面によってねじれの法則を探求しつつ、そこから新しい考えを得て、次の作品を作っている。その点で予測できないこと、事前に見えないものを含みながら制作していくことに楽しさを見出している。

ふくだ しょうこ FUKUDA Shoko